

國學院大學學術情報リポジトリ

談話室 祭式の伝統を守ること

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小野, 和伸, Ono, Kazunobu メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000146

祭式の伝統を守ること

小野和伸

昨秋に『第二の祭式教室』とも言うべき教場が竣功したことは、神職を志す学生の神前作法の修得に、その役割を充分に果たしていると言える。平成十四年に神道文化学部が新たに開設され、爾来神職資格を取得することを目的として就学する学生が増加の一途をたどると、必須科目である祭式を学ぶ教場が、既存の祭式教室だけでは賄えなくなった為、それを補う教場の存在が求められて来たのである。今日、相並ぶ双方の祭式教室が完備されたことで講義や補講の機会が膨らみ、その中で真剣に稽古に取り組む学生の姿を目にする度に、積年の夢が叶えられた充足感が得られ、正に「祭式の國學院」の名に相応しい環境が整ったことを実感する。

祭式と皇典講究所及び國學院大學との関係は深い。国家管理の下で明治八年に「神社祭式」が制定されても、神職の作法が区々まちまちで祭祀奉仕の不備な点が顕著であった当時の状況を危惧し、青戸波江あおと なみえ（松江出身の国学者、皇典講究所教授）は明治三十一年頃から神職研修会を自主的に開催し、作法の統一と神職の資質向上に務める。その実績が認められ、内務大臣より祭式作法の法令の原案作成を委託された皇典講究所は、青戸波江を中心に研究を重ね、遂に明治四十年に内務省告示「神社祭式行事作法」を完成させるに至ったのである。世に言う『青戸祭式』である。祭祀執行上の細則である行事と作法が規定化されたことは、その後の全国的な作法の統一に大きく寄与し、その姿が今日の神社祭祀に

も継承されて来ていることを思うと、皇典講究所が作法の規範を作成した功績は、歴史を画する重要な出来事だったのである。

神社祭祀に関わる諸制度は、世情や斯界の要求等により適宜制定・改正が行なわれたが、常に國學院大學はその中枢に立って神宮司廳や皇學館大學等の有識者の意見を精査し、「神社祭祀行事作法」の骨格づくりを精力的に行なってきた。殊に皇紀二千六百年の奉祝に際し（昭和十七年改正）、また戦後宗教法人と位置付けられた神社本庁設立に際し（昭和二十三年制定）、更にはサンフランシスコ講和条約による独立回復を気運にした「神社祭祀同行事作法儀註」見直しに際し（昭和四十六年改正）、祭式の普及と向上へ向けて國學院大學は「神社祭祀行事作法」作成に尽力した。青戸波江の高弟であった金光慥爾（國學院大學教授・神社本廳祭式講師）が、この戦前戦後の混乱期を通じて神社界を守った功勞者であり、國學院大學の祭式を支えた第一人者である。祭式の發展に生涯を捧げると共に『祭式大成 調度装束篇』を著し、神社有職故実の指導的立場として活躍したことも知られる。

「恩師の教えを守るのが弟子の務め」とは、父小野和輝が常に心に掛けていた言葉である。父は金光慥爾に師事し、四十年に亘り國學院大學教授並びに神社本廳祭式講師として祭式の指導に携わったが、國學院大學の神社界に果たして来た史実を踏まえ、師の教えを堅実に継承するからこそ伝統が守られることの必然性を説いたのである。父が著した『祭式大成 男女神職作法篇』は恩師の書名を受け継いだ書籍であり、堅固な師弟関係の証左と言える。私は國學院大學の非常勤講師として二十余年祭式の指導に当たり、今年度より専任として教壇に立つことになったが、神社界に於ける國學院大學の存在意義や「祭式の國學院」と称される意味は承知しているつもりである。祖父から三代に亘り國學院大學で教鞭をとることとなった母校との御縁に感謝しつつ、今後も祭式の伝統を守ることを責務とし、後継者の育成に邁進する覚悟である。

（神社祭式）